

# 生活や家庭環境が異なれば進路もさまざま タフに生きられる「汎用的な力」を育む

どんな進路を選んでも  
必要となる汎用力を育む

茨城県の常総市にある北海道西中学校は、南北20kmという広範囲から生徒が通っている。そもそも公立中学は高校に比べて習熟度も志向も多様な場であるが、同校は地理的な学区の広さから、農業、工業、新興住宅地など多様な生活環境が存在し、生徒たちの家庭環境も多岐にわたっている。

「生活や家庭の環境が多様ということ、生徒たちのキャリアにも多様性が求められるということです。各々の生徒に対し、本人、教員、保護者、地域が期待するキャリアの方向が必ずしも一致しないということが多々起こります。例えば、学業が優秀な農家の家庭の生徒に対し、本人は進学校を希望していても、保護者は家業を継がせるために適した高校を希望するなどです。これまでの赴任校とは異なり、単に基礎学力の強化を目指せばよいわけではなく、生徒個別の事情に合った多様な力の育成が求められていることに気付かされました。こうした現実と直面したときに、生徒たちが将来どんな仕事について必要となる『汎用的な力』を育成することが、多様な背景をもつ生徒の進路を預かる、公立中学の使命だと

考えました」(山中久司校長)

山中校長は、多様な進路のベースとなる「汎用的な力」を育むための、カリキュラム・マネジメントを始めた。まず、学校の在り方をグランドデザインするために、村上春樹の『海辺のカフカ』から引用した「世界でいちばんタフな15歳になる。」という学校全体のコミュニケーション・ワードを設定した。「いちばん」を平仮名にしたのは、No.1ではなくオンリーワンの意味を込め、「タフ」とは知徳体が揃うことで、知恵と知識と優しさをもつてほしいという想いからだ。

「本校の生徒は、地元に残って家業を継ぐ子もいれば、グローバルに活躍していく生徒もいるでしょう。いずれにしても変化の激しい時代で、今の15歳が社会に出るころに、世の中がどれだけ多様になっているかは誰にも想定すらできません。だから『タフ』でなければいけないのです」(山中校長)

## 多様な社会で必要な力を 身体と言語活動で学ぶ

目標とする生徒像を設定した後、彼らに必要な各論の力を育成するためのプログラム作りを始めた。同校が実践しているキャリア教育の取り組みが図1で、2016年度の「第10回キャリア教育優良校文部科学大臣表彰」

図1 北海道西中学校のキャリア教育の取り組み

	取り組み	育成する力	内容
他校種や地域・産業界等との連携・協力の取り組み	中1オリエンテーションキャンプ	人間関係形成・社会形成能力	中学校に入学して間もない時期に、協働して様々な活動をする中で、働いていくための基礎となるコミュニケーションスキルや他者の個性を理解する力を育てている。
	小中交流会	課題対応能力	生徒が主体となって小学生の体験入学を計画する取り組みである。手形アート制作や人文字作りなど、小学生との協働作業を中学生が企画・運営することで、実行力を育てている。
	職場体験学習	キャリアプランニング能力	50の事業所から興味関心をもった職業を選び、3日間にわたって体験学習を行っている。実施に当たっては、3か月前から事前学習を重ね、体験後はまどめを保護者向けに発表するなどの事後学習を行っている。
独自の組織的・系統的な取り組み	朝コミ(朝のコミュニケーションタイム)の実施	人間関係形成・社会形成能力の育成	生徒の思考力や表現力の向上や、さまざまな考えを受け入れながら自分の考えや価値観を深化させる取組。三人一組で行い、「何のために働くのか。」などのテーマについて意見交換を行っている。生徒会朝コミ委員会がテーマを設定し、水曜日朝の会前に実施している。
	海西版「知の技法」の活用	課題対応能力の育成	学び方や学び方のコツ・学ぶ楽しさを教師が手づくりで集約したものである。授業や集会時においても活用し、生徒の学習意欲向上につなげている。
	Thousand Prize基礎学力テスト	自己理解・自己管理能力の育成	全ての生徒が見通しをもって意欲的に取り組めるよう、簡単に基礎的な問題を各教科毎に設定し、「やればできる」を全生徒に味わわせることを狙いとした取り組み。
	学力向上カウンセリング	課題対応能力の育成	学期末における評価・評定を基に、各教科の担当教員と学習に関する個別面談を行う場で、年3回実施し、長期休業中や次学期に計画的に自らの課題を克服しようとする態度や意欲を養うことを狙いとしている。
	集団行動コンクール	人間関係形成・社会形成能力の育成	集団で一つの演技を作り上げる活動を通して、集団の一員としての自覚を高め、相手を尊重する態度を育むことをねらいとした取り組み。

を受賞した。特徴的な取り組みのいくつかについて紹介する。

ひとつは「集団行動コンクール」。クラスごとに、隊列を作ったり体操を行う演技を競うものだ。一見すると、全体主義的な、多様性とはかけ離れたものにも見えるが、目的は真逆だ。多様な仲間形成される集団の一員であることを生徒たちが意識し、仲間に支えられるなかで、自分がどう貢献すべきか

を自覚するための取り組みだ。

「少子化の時代に育った生徒たちは、意図的に集団という場を与えないと、集団体験で培われるはずの『人の気持ちや気配を読み取る力』が育ちません」(山中校長)

学年が始まってすぐの4月に毎年実施しているが、1年生の保護者からは「こんな真剣なわが子の表情を初めて見た」と非常に好評だという。



集団行動コンクール



コンクール当日は保護者も見学に来て、家庭では見せないキリッとしたわが子の表情に感動を受けているという。



教頭  
鶴見徹也先生



校長(取材時)  
山中久司先生



朝コミ

「ラーメンvsカレー」など身近なことでも、仲間の多様な考えに驚く生徒も多いという。

海西版「知の技法」

昨年度から作成し、生徒全員に配布。授業中に活用する他、生徒は家庭学習の際にこの冊子を参考に予習・復習してくる。



学力向上カウンセリング

毎学期の終業式の後、教科ごとにブースを設け、生徒が教員にアドバイスを求めにやってくる。



学が意欲を高め継続させる  
全教員が関わる取り組み

生徒の学が意欲を向上させるため

また、生徒の言語表現を育成する取組みが「朝のコミュニケーションタイム(朝コミ)」だ。毎週水曜日の朝の10分間で、朝コミ委員会が設定したテーマについて3〜4人のグループで議論する。テーマは中学生らしい硬軟さまざま内容だ。結論を出すことが目的ではなく、自分とは違う他者の多様な意見を聴き、考え、表現する力をつけることが目的だ。これはすべての教科のペースとなる力になっている。

の取組みのひとつが「海西版「知の技法」の活用」だ。「知の技法」は、9教科すべての教員たちが、自身の経験を基に、学びのコツや家庭学習のポイントをまとめた手引き書で、全生徒に配布し、授業や家庭で活用している。通学時間が長く、家庭学習の時間が十分にとれない生徒が多い同校は、まず学校での授業を充実させることが必至だ。冊子には「海西スタイル」という、各教科の授業に生徒がどう向き合うべきかが「授業前↓導入↓展開↓まとめ↓授業後」と指導案のように書かれている。「サウザンド・ブライズ基礎学力テスト」は、ごく基礎的な内容のテストを夏休み以外の毎月実施し、全11回の合

2013年に山中校長が着任して以来、こうした取組みを続けてきた結果、前述のキャリア教育優良校の受賞のみならず、学力テストで市内トップの成績を残す文武両道の学校へと変貌していった。

生徒たちの課題と向き合い  
課題にあった取組み

「生徒たちに自分の成績に対するこだわりをもってはじめて始めました。それだけでなく、評価を言語化して生徒に伝えることで、教員たちのスキルアップにもつながっています(山中校長) こうした一つひとつの取組みが「タフな15歳」へとつながっていく。

計で、1100点満点中1000点以上取ることが目標だ。「簡単なテストで成功体験を積みませ、希望をもたせることで、勉強が苦手な生徒にも学びを諦めさせないことが目的です。教科だけでなく学びは一生つづきます。その意欲さえ失わなければ、多様な社会を生き抜く力になると考えています(鶴見徹也教頭)」

同校ではさらに、各学期末に成績表を渡した後、担任以外の各教科担当と面談ができる「学力向上カウンセリング」を行っている。その学期の成績に對し、「なぜこの評価だったのか」「レベルアップするために次にどうすればいいか」を教科の先生に直接生徒がアドバイスを受けられる。

Editor's Voice

わかりやすくて確かな言葉で  
全教員、生徒がビジョンを共有

山中先生が着任した当時、生徒指導は「ハトロール」と呼ばれ、生徒を管理することに重きが置かれていたという。しかし、山中先生は信頼を示すことが大切と考え、「ウォーキング」と呼称を改め、生徒への向き合い方を変えたという。その結果、教員と生徒との距離感が縮まり、学校の雰囲気が一変したそう。同様に、コミュニケーションや取組み一つひとつが絶妙なネーミングにより、学校全体でビジョンを共有しやすくすることにもつながっていたように感じる。生徒が多様だからこそ課題も多様。そのような中で、学校の目指すべき芯となるビジョンを、ぶれずに現場に伝えていくためには、わかりやすく心に響きやすい言葉選びも大切なものかもしれない。

「学校改革には3年はかかりませんが、もともと多忙な教員たちに時間と手間をかけたわけではなく、ビジョンを共有して、小さなアイデアを積み重ねていった結果だと思っています(山中校長)」

「行ってきた取組みのいずれもが、本校の生徒たちにマッチしていたのだと思います。そうできたのは、多様な背景をもつ生徒たちの課題は何か、それを解決する取組みとは何かを、校長や教務主任を中心として学校全体で考えてきたからです。生徒にあった取組みができたことで、多様な生徒たちがそれぞれ力を発揮し、結果を残し始めているのだと感じています(鶴見教頭)」